
永久の鏡 —eternal mirror—

si-ta

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永久の鏡 | e t e r n a l m i r r o r |

【Nコード】

N 0 2 3 2 W

【作者名】

s i - t a

【あらすじ】

世界を支える白銀の柱——永久の鏡。エターナルミラー鏡と表現されるのは、それが「世界を映し護る空の支軸」であるから。永久の鏡の崩壊は世界の崩壊。それを防ぐために奪われてきた生命がある。世界を守りたいと願う少女と、少女を守りたいと願う仲間の物語。

1 - 幼馴染

朝を告げる鳥の声でフェリスは目を覚ました。外はだいぶ明るくはなっていたが、時計を見るとまだ五時一〇分だ。一九歳の彼は、この小さな農村ブロームで父親と共に暮らしていた。歳の離れた兄は随分前に街へと出て行き、母親は二年前に他界していた。

フェリスはいつもの習慣でカーテンを開く。早朝だというのに朝の光が妙に眩しく、フェリスは思わず目を細めた。赤茶色の髪に比較的白い肌。女性に間違われることはないだろうが、何処か女性的な印象を受ける目鼻立ち。背丈は平均的で、体の線は細い。

遙か遠くの白い柱がフェリスの視界に映った。雲をも突き抜け高くそびえ立つ。何のこともない、毎日見ている景色だ。だが、この日はその柱に目を留めた。柱の周りを白いものがぱらと舞っているように見えたのだ。何だろうと思いつつもそれ以上深く考えることなく寝間着を脱ぎ、服を着替える。もうすっかり春になっていたが、服を脱ぐととても寒かった。もしかすると柱の周辺は雪が降っているのかもしれない。日光量が十分な割に、この世界は気温が低い。真夏の特に暑い日であつても軽く汗ばむ程度だ。少し悩んでから、フェリスはオレンジ色のパーカーを羽織った。それでようやく納得がいったらしい彼は、居間へと向かう。

居間に入ると、父親がちょうど食事を終えたところらしかった。

「おはよ、父さん」

「おう」

「今日は早いな。もう仕事？」

「ああ」

父親の口数が少ないのは昔からだが、それにさらなる拍車をかけたのは母親の死だった。黙って玄関を出ていく背中を見送る。父親

は自宅裏の作業場で鍛冶をしていた。村の人から厚い信頼を得ている彼は、フェリスにとっても尊敬できる父親だ。

一人になった家の中で、朝食のパンをかじり始める。フェリスはこの静かなひと時に満足していた。だが、すぐにその静けさは吹き飛んだ。玄関の扉が勢いよく開かれる。その音に思わず肩がびくりと揺れた。

「フェリス！ 狼が出た、急ぐぞ！」

そう言っただけで家の中に飛び込んできたのは黒髪の少年だった。背丈はフェリスとあまり変わらないが、フェリスよりは幾分逞しい体つきをしているのが分かる。ライダー風の黒いブルゾンに薄灰色の長ズボンという出で立ちだ。背には長い槍を携えている。彼の名はアルトといった。ブロームの村長の息子であり、フェリスの幼馴染でもある。歳は一つ下の一八歳だ。フェリスとアルトは村の警衛係を任されていた。警衛といってもこんな田舎の農村を襲いに來る人間などまずいない。相手とするのは、そのほとんどが周囲の山から下りてきた獣たちだった。それでも兵力を持たないブロームにとつては大きな脅威になる。だから、こうして狼などが山から出てきた際には、村に侵入される前に退治に向かうのだ。

「こんな朝早くからまじかよ……。しょうがないな、すぐ行く」

溜め息を吐きながら、食べかけのパンを皿の上に投げ出した。部屋の前で立ちかけてある古びた剣を手取る。

「もたもたすんなよ、先行ってるからな！」

「……あ、待てよ！」

駆け出したアルトを追いかけないようにフェリスも走り出した。な

んとか追い付くと、速度を緩めてアルトの横に付いた。二人で並んで村の門をくぐり抜ける。

「はっ……はっ……、どっちだ、アルト？」

「西」

短く答え、アルトは顎で方向を示す。フェリスは少々息を弾ませていたが、体力的にはまだまだ余裕があった。しかし、横を見れば体を動かしている最中とは思えないような、アルトの涼しい横顔がある。彼があまりにも平然としているのを見ると、情けなさというか悔しさを感じずにはいられない。さらにフェリスに劣等感を抱かせるのは、アルトの端正な目鼻立ちそのものでもあった。フェリス自身も「綺麗」と褒められることはしばしばあったが、「男らしい」と言うには何かが決定的に違っていた。女の子からの人気を集めるのも決まってアルトの方だった。尤も、アルト本人が彼女たちに興味を示したことはないのだが。

「……何だよ」

「え？」

「ジロジロ見んなよ、気持ち悪い」

怪訝そうなアルトの一瞥が向けられる。気まずさを感じたフェリスは慌てて目を逸らした。今の目の背け方は余計に不自然だったなと後悔したが、アルトはそれ以上特に何も言ってこなかった。

アルトのことを羨ましく思うことは多々あったが、フェリスは彼を妬んでいるわけではなかった。アルトの人柄は十分すぎるほど知っていた。物心ついた頃からの付き合いなのだから。それはアルトも同じだった。

だいぶ山の近くまで来た辺りで、アルトが走るスピードを緩めて

停止した。フェリスもそれに倣って足を止める。前方数メートルほどのところに、一匹の狼の姿を捉えた。

「いくぞ」

「ああ」

短く互いに確認し合ってから、フェリスは剣を、アルトは槍をそれぞれ構えた。狼が唸り声を上げ、フェリスに飛び掛かってくる。フェリスはその牙を剣で受け止めた。武器を持っているとはいえ、体躯の差は大きい。狼の体重に対抗するのは容易ではなかった。フェリスは歯を食いしばる。

その横でアルトが大きく槍を振り上げた。槍を構えて狼に突撃する。アルトは、槍の先端を見事狼の胸に突き刺した。狼は呻きながら後方に飛び退く。それにより槍が胸から抜け、大量の血が流れ出した。狼は再度飛び掛かるような体勢をとっていたが、結局その場に倒れ込んだ。その間にも辺りの土がどんどん赤く染まっていく。しばらくして、狼は完全に動かなくなった。

何度やってもやはり気持ちのいいものではなかった。それはアルトも同じようで、狼が死ぬ逝くのを見届けるだけになってから、彼はずっと視線を逸らしていた。

「……じゃ、戻るか」

「そうだな」

そう言っただけでアルトの方へ顔を向けたとき、彼の後方にもう一つの影が迫っているのを見た。フェリスが声を上げる前にアルトもその気配に勘付いたらしく、後ろを振り返った。もう一匹、先程のよりも大きな狼だった。涎の滴る鋭い牙はアルトの間際まで迫っていた。アルトは槍を構え直すが、既に遅すぎた。

「——ぐあ……っ！」
「アルト！」

フェリスは咄嗟に剣を構える。それに勘付いた様子の狼は、素早くアルトから口を離し、標的をフェリスに切り替えた。重低音のよな唸り声を上げる狼の目がフェリスを捉える。次の瞬間にはフェリスへと躍り懸かっていた。

「……くそっ」

フェリスは剣で再び狼の攻撃を受け止める。アルトの方へちらりと視線を向けると、どうにか急所は免れたようだが右肩から腕に掛けて血で真っ赤に染まっていた。相手の狼の体が重い。圧されているのは確実にフェリスの方だった。視界の端でアルトが立ち上がるのが見えた。ほとんど左腕のみで槍を構えようとするが、それは無理に近かった。単に重量を支えるだけなら可能かもしれないが、長さのあるアルトの槍を扱うには、両手でバランスを取る必要があった。

「く……っ！ 大丈夫か、アルト！？」
「一応……な。悪い、油断した」

フェリスは狼に対抗しながらアルトに声を掛けた。そうしている間にも少しずつ後ろに押されていく。

——なんとか自分が時間を稼いで、その間にアルトに応援を呼びに行かせるか。でもそれは無理だ。アルトが狼の視界から消えるまで持たせる自信はないし、第一こいつが一人で大人しく村に戻るわけもなかった。こういう状況を絶体絶命というんだろう。

そのときだった。

「加勢するぜ！」

不意に知らない男の声が響いた。

2 - 田舎の村を目指して

「加勢するぜ！」

陽気そうな、よく通る男の声が響いた。周りに気を配る余裕もなかったせいか、フェリスからするとその男の登場は突然だった。顔は見えないが、大振りの片刃剣を構えた男が狼に突っ込んでくる。彼に驚いて、思わず剣を握る力が緩んだ。その瞬間に狼はフェリスに頭から襲い掛かる。しかし狼の牙がフェリスに届くより早く、男の剣が狼の体を真つ二つに引き裂いた。狼はその一瞬で息絶えたようだった。

「た、助かった……」

フェリスは情けなく気の抜けた声を漏らした。緊張の糸が切れ、剣を握る腕からも力が抜ける。

狼を仕留めた男が近付いてきた。長身の若い男性だった。白いシヤツに黒いベスト、下は革製のズボンという出で立ちだ。それほどがっちりした体格には見えないが、フェリスの背丈ほどもありそんな大振りの剣を片手で造作もなく肩に担ぐ。男はフェリスには目を留めず、アルトの正面で立ち止まった。

「ひつでえ傷だな。歩けるか？」

「……ああ」

そう答えて、アルトは男性をじろじろと観察した。男性の左腕に巻かれた腕章に目を留め、口を開く。

「お前、政府の役人か」

「ん？ ああ、これな。役人っていうか軍人だけどな、俺は」

男性はアルトの視線の先を辿り、自身の腕章を見ながら答える。容姿も気さくな態度も、政府と聞いて思い浮かべるような堅苦しい雰囲気とは程遠かった。男性は徐にベストを脱ぎ、アルトの肩にそれを巻こうとした。が、アルトは素早く身をかわす。

「結構だ」

「ちえ、じゃあ自分で巻いとけ」

男性は口を尖らせながら、ベストを軽くアルトの方に放り投げる。知らん顔をしているアルトだったが、傷の深さからして何らかの処置は確実に必要だった。フェリスは男性のベストを拾い上げ、黙ってアルトに差し出す。アルトは渋々といった様子だったがそれを受け取った。

「で、そつちのあんたは怪我、ねーか？」

男性の視線がフェリスへと移される。彼の顔を真正面から見れば、なお若そうに見えた。二十歳そこそこにしか見えないが、政府の腕章をつけるほどの地位ということを考えるともっといつているのだろうか。

「あ、俺は平気だ。その、本当に助かった。ありがとう」

「よし、ならよかった」

そう言って男性は笑顔を見せる。

「で、政府の人間がこんな田舎で何してんだよ」

「おい、アルト……」

後方から男性にぶつけられたのはアルトの声だった。先程までも彼に対し刺のある態度を見せていたアルトだったが、今度はより露骨に敵意に近いものを示していた。男性の何が気に入らないのかフエリスには分からなかったが、助けられたという以上、一応軽く窘める。でも、アルトは黙って男性に睨むような視線を向けていた。

「何って、仕事だぜ。ブロームって村に向かってんだ」

空気を読むのが苦手そうというか、楽観的に見える彼でもさすがにアルトの敵意は感じたらしい。少々ばつが悪そうに頭を掻きながら答えた。

「ブローム？ 俺たちの住んでる村だ。案内するよ。助けてもらっ
たし」

「お、まじか！ そりゃ奇遇だな、頼むぜ。地図見てもよく分かん
ねえし実は困ってたんだ」

一行はブロームの方角へと歩き始めた。男性を避けている様子の
アルトだけは、一歩先を歩いていた。

「そっぴゃあんだ、名前は？ あ、俺はフェリスであいつがアルト」
「俺？ クライヴ。にしても正真正銘の田舎だな。見事になんもね
え」

そう言ってクライヴは小さく嘖き出した。

「あんだ、今ちよつと馬鹿にしただろ」

「ちがう、そうじゃねえって」

手を顔の前で大きく振りながらクライヴは笑う。

「俺も田舎の出だからな。なんか懐かしいんだよ」

そんな会話を交わしている間に、遠目に村の門が見え始めた。門のところにはワンピース姿の少女が見える。向こうも自分たちに気付いたようだった。

「アルト！ フェリス！ 全然戻ってこなくて心配したんだから」

少女が駆け寄ってくる。長い柔らかな薄茶の髪が揺れる。彼女はフェリスたちのもとまで着くと、すぐにアルトの肩に目を留めた。

「どうしたのその肩…… ちょっと見せて」

「いや、大したことないって」

「大したことあるでしょどう見ても」

アルトはこうして彼女に世話を焼かれるのが嫌いだった。フェリスもそれを知っていたが、この件については彼女の言うとおりだ。

「ニナ、アルトの手当て、頼むよ」

「言われなくても分かってる」

そのとき、今まで黙ってフェリスの横にいたクライヴが不意に口を開いた。

「お、あんたがニナか。そりゃちょうど良い」

フェリス、アルト、ニナの三人は一斉にクライヴに視線を移した。

クライヴは二ナだけを真っ直ぐに見据えている。どこか茶化すような、その声のトーンは先程までと変わらない。ただ、二ナを見るその目だけは妙に真面目なものだった。

「二ナ・ファビウス。俺はあんたに用があつて来た」

二ナもクライヴの顔を見つめ返す。その瞳には、不安の色が浮かんでいた。

3 - もう一人の幼馴染

ニナはブロームの教会で暮らす、フェリスと同じく一九歳の少女だった。幼い頃からフェリスとアルト、そしてニナの三人はいつも一緒に過ごしていた。ニナに両親はいなかったが、彼女がそのことで辛そうにしているのをフェリスたちが見たことは一度もない。ニナは「突然いなくなったわけでもないし」と昔から言っていた。記憶がなければそういうものなのだろうか、とフェリスはなんとなく理解していた。面倒見の良い彼女は、年下のアルトだけでなく、フェリスにとっても姉のような存在だった。何かある度にべそをかいているのはいつもフェリスやアルトで、逆に一番勇敢で強く、三人を引っ張っていたのはいつもニナだった。

そんな関係が少し変化したのはフェリス、ニナ一三歳、アルト一二歳の頃だ。フェリスとアルトは村を守るために武器を持ち、戦うようになった。一方で、三人の中で最も強く頼れる存在であったニナは、教会の手伝いや、村の幼い子どもたちの世話に回っていた。三人の関係が変化したというよりも、フェリスとアルトが、ニナは女性であり、自分たちが守るべき存在だと認識し始めたという方が適切かもしれない。

フェリスとアルトは、並んで壁にもたれ掛かっていた。結構な時間経ってから、ようやく口を開いたのはフェリスの方だった。

「アルト、お前なんであいつ——クライヴのことそんな嫌ってんだ？」

「別に嫌ってはない。なんとなく腹の底が見えないだけだ」

「……腹の底？」

フェリスは聞き返したが、アルトはそれ以上答えなかった。

ニナはクライヴの用件を聞くため、今はアルトの家にいる。村長、つまりアルトの父親も交えてだ。クライヴはニナと一対一で話すつもりだったようだが、アルトが断固としてそれを許さなかった。村長を入れるということでもアルトは納得していない様子だったが、クライヴもそれ以上は譲歩しないと諦めたらしい。政府から直接遣わせるほどの用件なのだから仕方ないのかもしれない。

「政府の軍人なんだろ、あいつ。……何の話だろうな」

「……さあな」

フェリスは再びアルトに話し掛ける。もちろん彼にもそんなことは分らないだろうと理解はした上でだ。だからアルトの素っ気ない反応は予想通りではあった。

沈黙が流れる。アルトは塀に寄り掛かった体勢のままじっと動かない。一心に考え込んでいるようだった。フェリスも同じように考えていたが、そこまで集中することはできなかった。

分らないものは分らない。アルトはひどく警戒していたが、フェリスの目には、クライヴは親しみやすく裏表のない人柄に映った。それに村長も同席しているのだ。樂觀的すぎるのかもしれないが、そんなに心配する必要もない気がした。

「——きゃあっ！」

そんな静けさを破るように、突然甲高い女性の声が響いた。フェリスとアルトは同時に声のした方向に顔を向ける。村の門のところに小柄な少女の姿を捉えた。何とも残念というべきか、ほんの小さな段差につまずいて派手に転倒した様子だ。

一瞬互いに顔を見合せてから、二人は少女の元に駆け寄った。少

女は手をついてゆつくりと体を起こす。

「あの、大丈夫か？」

「きゃああああっ！……ああ、びつくりした」

肩を大きく跳ねさせ、少女が振り返る。フェリスは彼女の驚きっぷりの方が余程びつくりに値すると思ったが、口には出さず黙っておいた。

「あ、大丈夫です。へっちゃらです。よくあることですから。お気遣いいただきありがとうございます」

えへへ、と少女は笑い、ぴよこんと立ち上がった。その弾みで、顎の位置で二つに括られた、癖のある銀髪が揺れる。背は低く、体つきもとても華奢だった。肌は透き通るように白い。顔立ちから推察すると、年齢は一四、五歳といったところだろう。いずれにしても、知らない少女だった。ブロームの人間の顔は皆知っているから、どこかから訪ねてきたようだ。

「あんた、どこから来たんだ？ 迷子か？」

横でアルトが口を開く。その声には呆れの色が浮かんでいる。

「し、失敬な！……ええと、この村の名前はブロームであっているのでしょうか？」

「ああ、そうだけど……」

「やっぱり！ ほうら！ ならわたしは迷子じゃありません！ わたし、セレスティア・エヴラールと申します。クライヴ様の付き人として……」

「——おう、セレス！ 遅かったな」

彼女がそこまで言ったところで、アルトたちの後方から声がした。振り向くと、クライヴが大きく手を振りながら歩いてくるのが見えた。その隣には二ナの姿もあった。

「ク、クライヴ様っ！ その、ひどいです！ 置いてきぼりなんて、あんまりです！」

「悪い悪い。でもよく一人でここまで来れたな。いやーお前も成長したもんだ」

「クライヴ様！ それは、わたしを馬鹿になさってるのですね！」

「だってセレスお前、馬鹿じゃねーか」

「クライヴ様っ！ いい加減怒りますよっ！」

フェリスたちをそっちのけに、セレスティアとクライヴは喋り続けていたが、不意に思い出したようにクライヴは二ナに視線を向けた。

「じゃ、あんた、ゆっくり考えといてくれ」

「……はい」

二ナもクライヴの目を見返す。セレスティアは喚くのをやめ、二ナをじっと見つめていた。

「ああそうだ、えーっと——アルト。今日はあんたの家に泊まらせてもらうからな。よろしく。セレス、お前も行くぞ」

「何だよそれ、聞いてねえぞ。……おい待てよ！」

クライヴは意味ありげに二ナの肩に手を載せてから、再びアルトの家の方に向かう。彼のあとを追うようにセレスティアも駆け出す。彼女は途中で思い出したようにフェリスたちを振り向いて一礼する

と、クライヴの方へ走っていった。

「二ナ、何だったんだよ。あいつの話って」

三人で残されてから、最初に口を開いたのはアルトだった。二ナの視線がアルトに向けられる。

「大したことじゃない」

「嘘言っなよ！　じゃあ話せよ！」

「……私にだって秘密を持つ権利はある。いい加減にして」

声を荒げるアルトに対し、二ナは淡々と言い放った。彼女の意志の固さはアルトもよく知っている。だから返す言葉が見つからないようだった。

「じゃあ、またね。手伝いに戻らなきゃ」

そう言って二ナは踵を返す。フェリスとアルトは黙って二ナの後ろ姿をただ見送った。

4 - 決意

その夜、フェリスは中々寝付けずにいた。アルトと同じように、やはり二ナのことが気に掛かっていたのだ。

フェリスはふと窓の外に目を遣った。常夜灯が村の広場をぼんやりと照らし出している。その薄明かりの中に、人の姿があった。

「二ナ……？」

遠目な上、闇に浮かぶシルエツトしか捉えることができなかったが、フェリスはそれが二ナだとすぐに分かった。考えるよりも先に体が動く。気が付けば、フェリスは村の広場へ向かっていた。

「二ナ、何やってんだよ。こんな時間に」

突然声を掛けられたことに驚いたのか、二ナははっとした様子で振り返った。相手がフェリスだと分かったと、安心したように表情を緩める。単に薄暗いせいかもしれないが、二ナの表情はどこか悲しげに見えた。

「花を見てたの」

「花？」

フェリスは二ナの視線の先をゆっくりと辿る。彼女が眺めていたのは広場の中央にある花壇だった。十年程前に、教会が中心となつて造ったものだ。花を植えたり、その世話をしたりということは村人全員で行っている。

しばらく花壇を見つめてから、フェリスは二ナに視線を戻した。

彼女が人一倍この花を大切にしているのは知っていたが、こんな夜遅くに花を見にきたというのはよく分からない。フェリスの疑問を察したようにニナは口を開いた。

「なんか、急に色々懐かしくなつて。最初何を植えるかで、エイミーさんとブライアンさんちのお祖母さんが大喧嘩してたなあとか」
「俺の父さんが雑草と間違えて片っ端から薙引っこ抜いたり、とか？」

ニナは呆れたように眉を曲げながらもくすつと笑う。園芸に縁遠い父親が、慣れないことに力を入れ過ぎたあまりの失敗だった。その妻、つまりフェリスの母親を除いては誰も彼を責めなかったが、父親はひどく落ち込んでいた。彼が現在も花壇の手入れに消極的なのはそのためだ。

「アルトはカブトムシの幼虫気持ち悪がつて大泣きしてたよね」
「俺は素手で平然と幼虫掴んでるニナの方が怖かったけどな」
「何それ。フェリスたちが情けないからでしょ」

ニナにはぴしゃりと言い返されたが、別に彼女は怒っているようではなかった。

「フェリスのお母さんは、花のことすごく詳しくったね」
「……母さんはそういうの好きだったからな。父さんと違って」

ニナが軽く目を伏せる。それをフェリスは見逃さなかった。

「ニナ……何あったんだよ。クライヴに何言われたんだ？」

フェリスの言葉に、ニナは小さく溜め息を零した。彼女はしばらく

く押し黙っていたが、ゆっくり瞬きをしてから口を開く。

「協力してほしいって言われたの」

「協力って？」

「エターナルミラーの修復」

「エターナル、ミラー……？」

「そう」

ニナは顔を上げた。「ほら、あれ」と言っただけで彼女が見つめるその先には、遙か遠くにそびえ立つ白銀の柱があった。光を発しているわけではないのに、その柱は闇の中に白く浮かび上がっている。フェリスは今朝見た光景を思い出した。白いものの柱の周りを舞う。あれは柱が崩れかけている、修復を必要としているサインということだろうか。

「でも修復ならクライヴたちがやれるんじゃないか？ ニナは別に

……」

「だめなの。特定の体質を持つ人間がいないと、修復はできないって。私は、その特定の体質だった」

「よく分かんないけどさ、別に協力なんかしなくてもいいんじゃないか？」

フェリスがやんわりと止めたのは、なんとなく嫌な予感がしたからだ。口にもした通り、“体質”と聞いても実際何をするのか、全く想像がつかなかった。それが不安な気持ちにさせる。

「私が協力しなかったら、多分世界はなくなる」

ニナの淡々とした声が響く。フェリスにはその意味が分かるはずもなかった。ただ、ニナが既に協力を決めている、ということをつ

エリスは感じ取った。

「なんだよいきなり、なくなるって」

「エターナルミラーは空を支えてる。柱が崩れたら、この世界は滅びる」

「……クライヴがそう言っただけなんだろう？ 本当かどうかなんてわかんないだろ、そんなこと……」

「嘘じゃない」

二ナは再び深く息を吐いた。間があってから、二ナはゆっくりと言葉を紡ぎ始めた。

「教会の書庫にあつた歴史書で読んだことがあるの。千年近く前に、一度エターナルミラーは崩壊した。豪雨が続いて、日も昇らなくなつて、もう少し修復が遅れていたら、世界は本当に消えてた」

「そんなの、……単なる作り話じゃないのか」

「日付とか、詳しい記録も残ってる。その事件のせいで、ほとんどの陸地は海の底に沈んだの」
「……」

この世界で大陸と呼べるのは、フェリスたちが今いるこの陸地だけだった。しかし太古の時代には人の生活があつたことを示す、海底遺跡は数多くある。未だ確認されていないものも数知れずあると言われていた。そういったことが頭を過ぎり、フェリスは二ナに反論できなくなった。

「気温が低いのもそのせいだって言われてる」

「……。もう協力するって、決めたのか？」

「うん」

今度はフェリスの口から溜め息が漏れた。彼女の意志の固さを知っているだけに、どう止めたらいいのかも分からなかった。

「ブROOMを出す……んだよな」

「そうなるね」

「いつ？」

「多分、明日にでも」

そんな急だとは思ってもいなかったフェリスは少なからずショックを受けた。けれど、そう聞いて二ナがここに来た理由が分かった気がした。

「アルトにもちゃんと言えよ」

「それは……だめ」

「あいつがどんだけ心配してるのか知ってるだろ。言えよ。絶対だぞ」

フェリスは口調を強める。それが珍しいことだったからか、二ナは少し戸惑った表情を見せた。諦めたように小さく頷いてから、彼女は何もない空をぼんやりと見つめていた。

「明日のいつ出るんだ？ アルトと見送りに行くよ」

「ありがとう。……お昼頃、かな」

「そっか……。わかった。一つだけ確認するけど、帰ってはくるんだよな、ちゃんと？」

「もちろん」

二ナは軽く首を傾げて笑う。フェリスはそれで少しほっとした。広場の時計が既に日付が変わったことを告げている。

「私、そろそろ戻って寝るね」

「じゃあ俺も。おやすみ」

「おやすみなさい」

そう言つて二人は互いに背を向け歩き出す。しばらく歩いたところでニナは足を止め、後ろを振り返った。フェリスの背中には既にかなり小さくなっている。

「……ごめん、やっぱりアルトには会えない」

ニナは小さく呟いた。

フェリスと同じくらい、アルトも大切な存在だ。でも——あの子は鋭すぎる。

5 - 導き人現る？

翌朝、フェリスは父親と二人で朝食を取っていた。特に会話もないが、これが二人の日常だ。食事を終えたらすぐ二ナのところに行こう——そんなことを考える。出発は昼頃になるだろうと彼女は言っていたが、アルトにもちゃんと話をしてほしかった。

不意に玄関の扉が勢いよく開く。昨日と同じような状況。そして姿を見せたのも、昨日と同じくアルトだった。アルトは無言で歩み寄ってきたかと思うと、怪我をしていない方の腕を伸ばし、フェリスの手首を乱暴に掴んだ。そのままフェリスを外へと引っ張る。フェリスは普段の癖で部屋の隅に置かれた剣に手を伸ばした。

「あ、待てよ剣を……」

「違う」

その声で、フェリスはアルトが怒っていることを感じ取った。手首を掴まれたままアルトに従って外へ向かう。家から出る直前に、フェリスは父親と目が合った。寡黙な彼はいつもと変わらない静かな目をしていた。

家の外に出ると、アルトは乱暴に手を振り離す。その勢いでフェリスは前に数歩よろけた。フェリスは姿勢を立て直し、アルトの方を振り返った。いきなり何故こんなことをされるのか分からない。

「今朝起きたらあの男がいないから、親父に聞いたんだ。二ナを連れて村を出てったらしい」

「あの男って、クライヴ……だよな？ え、けど、二ナ……」

そこまで言ったとき、フェリスは突然アルトに胸座を掴まれた。その剣幕にフェリスは怯んだ。

「フェリス、お前知ってたんだろ！？ 何で止めなかった……！」

アルトは基本的に冷静で、喧嘩っ早いタイプではない。ましてや手が出るなどということは稀だった。フェリスはそのことをよく知っている。そして、アルトが普段の落ち着きを欠くほど取り乱すときは、いつも二ナのことに関係していることも。

「一応止めたよ。でもあいつ決心してるみたいだったし、言っても無駄だと思ったん……」

「力尽くでもやめさせるよ！ 行かせたら、二ナが死ぬことも分かってたんだろ！？」

フェリスは思わず「え？」と聞き返す。

「何だよ……それ」

「親父問い質したら、その何とかの修復つてのをした適応者は死ぬんだ。……知ってたんだろお前も」

「知らないよそんなの。だって二ナ……絶対戻ってくるってそう言ってたし……。出発も昼頃だった——」

そう言い掛けて、フェリスは自ら口を噤んだ。昨晚のことを思い出してみれば、二ナの様子は確かにおかしかった。知らなかったのは事実だが、自分は気付くべきだった。アルトだったら、間違いなく気付いていただろう。

「……ごめん」

フェリスはぽつりと呟く。アルトは苛立った様子で溜め息を吐きながらも、フェリスから手を離れた。

「もういい」

アルトもフェリスのことは十分すぎるほど分かっている。フェリスは二ナがどうなるか知っていて、見ず見す行かせるような真似をする奴じゃない。それに、つい頭に血が昇っていたが、フェリスを責めたところで何の意味もない。アルトは自宅の方角へと踵を返した。

「……どこ行くんだよ、アルト」

「二ナたちを追う。世界が壊れるか何だか知らねえけど、死なせてたまるか」

アルトは本気らしかった。しかし、フェリスの視線は昨日傷を負ったばかりの彼の右腕にいく。

「無理だろ。そんな怪我したばっかで……無茶だ」

「じゃあお前は二ナに死ねって言うのか？ とにかく、俺は行く」
「……分かったよ。じゃあ——」

——俺も行く。

フェリスはアルトの顔を真っ直ぐに見据え、そう言った。怪我人である彼一人で行かせるわけにはいかなかったし、何より、昨夜彼女を止められなかった自分の責任でもあるのだから。

*

「——もう信じられません……っ！ クライヴ様の馬鹿！ 女ったらし！ 根性悪！」

セレスティアは一人で走っていた。急いでいたためか、今日は左右で髪の手入れされている高さが微妙にずれている上、ほつれた髪があたりから出ていた。

彼女が目覚めたのはつい先程のことだ。目覚めたときの景色がいつもと違うことに一瞬慌てたが、前日にブROOMという農村を訪れ、村長宅に泊まったことをすぐに思い出した。しかし、ここからが問題だった。セレスティアが付き人を務めている、彼女の主人とも言えるクライヴの姿が見当たらなかったのだ。居間に下りて村長に尋ねると、例の彼女を連れて明け方村を出て行ったというではないか。村長が言うには自分のことも起こそうとしていたらしいが、すぐに諦めて置いていつたらしい。

村の出口に向かって走る。クライヴたちが発ってから既に数時間が経過している。多少走ったところで追いつけるわけもないのだが、セレスティアは走っていた。村の門が見えた辺りで、セレスティアは視界の前方に二人の人物を捉えた。昨日村に到着したときに出会った若い男性だ。赤茶の髪の剣を携えた彼が、昨日転んだ自分に声を掛けてくれた人。短い黒髪の槍を背負った方が、村長の息子で――なんか失礼だった人。昨日は気付かなかったが、槍の彼は右肩から腕に掛けて包帯を巻いていた。そんな二人の会話が聞こえてくる。

「行くにしても……どこに向かえばいいんだよアルト？」

「それは……」

「親父さんに行き先聞かなかったのか？」

「聞いたに決まってんだろ。そこまでは知らないらしい」

二人ともひどく苛立っているように見えた。どうしたんだろ、と心の中で首を傾げる。二人の方を見ながら走るセレスティアは、足元への注意が疎かになっていた。爪先がほんの小さな段差に引っ掛かる。

「つきやああつ！」

案の定、セレスティアは見事に転んだ。その悲鳴を聞いた男性二人の視線が集まる。セレスティアは黒髪の方の男——アルトと視線がぶつかった。

「お前、あのクライヴってやつ……」

「な、何ですか！ 何かわたしに文句でもあるのでしょうか！」

つい喧嘩腰になるセレスティア。自分でも意味はよくわからない。しかし、アルトの反応はセレスティアの予想したものと違っていた。男性二人は互いに視線を合わせる。数秒の間があってから、再びアルトが自分に視線を戻した。セレスティアは立ち上がることも忘れ、相手の瞳を見つめる。相手もじっと自分の目を見つめていた。

「いいところに来た」

「——……え？」

セレスティアはゆっくりと首を傾げる。アルトの後ろで、赤茶の髪の男——フェリスも同意するように頷いているのが見えた。

6 - 静かなカウントダウン

『クライヴ様、適応者のデータが届いてますよ』

『お、サンキューセレス。……へえ、適応者って何人が候補がいるもんなんだな。これ、俺が選んでいいの？』

『はい。この件に関してはクライヴ様に一任するとのことです』

クライヴは、コーヒーを片手に手渡された数枚の紙を捲っていく。

『———そこでこっちは……教会で住み込み手伝い、と。しかもこの子、孤児みなしこか。ちょうど良いな』

『親がいないとちょうど良い、のですか？』

『ん？ そりゃそうだ。家族がいたら悲しむだろ？』

クライヴの言葉に、セレスティアは軽く目を伏せる。

家族のいない人間がこの世から消えたところで誰も悲しまない。あなたはそう思っているんですね。

『どうした、セレス？ とりあえず今週中にはこの子んとこ行くから。お前も目通しとけ』

『はい……分かりました』

セレスティアは渡された紙に視線を落とした。適応者の名前は二ナ・ファビウス、年齢は一九歳。左上には写真も貼られていたが、彼女の意思で撮影されたものでないのは明らかだった。恐らく諜報機関により撮られたものだろう。

初めに見た印象では、普通に綺麗な人だと思った。一九という年齢にしては大人びて見える。でも写真に写った彼女の顔をじっと見

つめるうちに、何だか胸が痞^{つか}える感じがした。

『クライヴ様……』

『ん、何だ？』

クライヴは椅子の背凭れに体重を預け、頭をセレスティアの方に仰け反らせた。その様子を見て、セレスティアは心の中で溜め息を零した。彼は何とも思わないのだろうか。否、きっと気付いてもないのだろう。それなら自分がどうこう言う権利はない。

『うつん、やっぱり何でもないです』

そう言つてセレスティアは笑顔を作った。

時々思ふことがある。一見無邪気で能天気に見えるこの人に——
本当は心なんてないんじゃないか、と。

「だーから！　だめです！　だめなんです！　付いてこないでくださいってば！」

セレスティアは振り返るなり両手を腰に当てた。怒るというよりは困っていると表現した方が正しいだろう。彼女のすぐ後ろには、フェリスとアルトが続いていた。

「別に俺らのことは気にしないでいいよ。それより、早く行かなきゃいけないんだろ？」

「そ、それはそうですね……。あ、でも、だめです！　付いてきちゃだめです！」

「あんたもあの男と一緒になのか？ 罪のない一般人を犠牲にしていると思ってるのか？」

「そ、それは……。で、でもっ、クライヴ様だって多くの人の命を守るために仕方なく……」

「頼む、到着したらもうあんたに迷惑は掛けない」

「俺も頼むよ」

セレスティアはさらに困ったように俯いた。どうやら泣き落としには弱いようだ、とフェリスとアルトは思ったが、実際には違っていた。

彼女の頭を過ぎったのは二ナの横顔だった。正確には二ナとどこかで重なり合う、別の人物だったのかもしれない。

「ああもう、分かりましたっ！ ……じゃないけど、もう、勝手になさってください！ でも、わたしは、その、あなたたちに協力はできませんからね……！」

そう言い放ち、セレスティアは一人すたすたと歩き出した。アルトとフェリスもすぐに彼女に続く。

「ありがとな。セレス、だっけ？ 俺はアルトだ。で、こっちのが」

「フェリスだ。よろしくな」

「わ、わたしのことはちゃんとセレスティアと呼んでください！」

深い理由はない。セレスと呼ぶのはクライヴだけだったから——
彼以外にそう呼ばれるのはなんとなく、嫌なだけだ。

「じゃ、儀式まではここで寝起きしてくれ。必要なものは揃ってるはずだ。ま、何かあれば部屋の外で待機してるやつに言え」

「儀式つていつになるんですか？」

「……聞いてどうすんだ？ 今更逃げよう、なんてことはないよな？ 一応念のためだけだな——」

「分かってます」

「……五日後の予定だ。色々準備が面倒らしいからなあ。じゃーな、多分、次会うのはそのときだ。まあ、怖がることねーよ。あんたは『鏡』の一人として永遠に歴史に刻まれる。名誉なことだろ？」

そう言つて二ナの肩をぽんと叩き、クライヴは部屋をあとにした。ぼつんと残された二ナは、周りを見回した。一人で過ごすにはあまりに広い部屋。まだ真新しい家具が一通り揃っている。それ以上に孤独を感じさせるのは、あまりに清潔な、人工的な匂いだ。

エターナルミラーの修復のために生命を捧げた者は『鏡』と呼ばれ、国によって手厚く祀られるそう。彼の、クライヴの言葉の通りかもしれない、と思う。所詮他人である優しい人たちに迷惑を掛けながら生きるより良いとも思えた。こんな自分の命一つで世界を——そしてフェリスたちのことも救えるのなら、喜んで受け入れるべきなのだ。

「五日、か」

それが自分の命の期限。すぐにでも死ぬ覚悟で来たはずが、いざ突きつけられてみるととても短く感じられた。窓の外に視線をやれば、嫌でも目に飛び込んでくる例の柱、エターナルミラーがあった。距離が近いせいだろう。ブROOMから見るよりもさらに白く、輝いて見えた。そしてその柱の上の方からはらりと舞い散る崩壊の兆し。それすらも白く輝き、美しかった。

タイムリミットまであと五日――。

7 - 儀式四日前、再会

——つ、疲れた……。

延々と歩き続けること、丸一日以上が過ぎている。フェリスの足は棒になっていた。ブROOMを出発したとき朝だった。日が徐々に高く昇り、やがて沈んで夜を迎えた。そして再び日が昇り——今はその日も暮れ始めたところだった。恐らく、本来ならこんなに掛からない距離だろう。先導するセレスティアに道の途切れた場所に誘導され、三人揃って引き返すということを何度か繰り返していた。

とにかく、丸一日以上が経っているながら仮眠はおるか、休憩さえ取っていない。フェリスは既に疲労と眠気で倒れそうだった。にも関わらず、アルトはといえば疲れた素振りも見せず黙々と歩き続けている。アルトだけではない。まだ十代半ば程度にしか見えないセレスティアも、ペースを緩めることなく先頭を歩いていた。

おかしいのは自分じゃなくて二人の方だ、とフェリスは思う。でも言えない。あんな小柄な少女が平然と歩き続けているのに疲れたなんて言い出すほど、俺は男を捨ててはいない……つもりだった。

「……あの、セレスティア？ 少し休みたいんだけど……」

「だめです」

「だめに決まってるんだろ」

恐る恐る申し出たフェリスの言葉を、セレスティアはあっさりと払い除けた。何故かアルトにまで一緒に却下される。

「もう政府の管轄エリアに入ってますから。あとちょっと我慢してください」

セレスティアが足を止めることなくそう口にした。フェリスは仕方なく後ろを歩きながら周囲を見回す。人気は^{ひとけ}なく静かだ。政府の置かれている場所というから、もっと大都会を想像していた。もちろんブロームのような田舎とは全く違う。道は綺麗に舗装されており、至る所に緑があつた。ブローム周辺のような野生のままの緑ではなく、きちんと手入れの行き届いた緑だ。

人気がないのは政府関係者しかないエリアだから当然なのかもしれない。だが、建物もなかった。ただ一つ、前方に見える高層の建物を除いて。単に高いだけでなく、大きさ自体も目を瞠るほどだ。フェリスは所謂『超高級ホテル』というものをイメージした。生まれも育ちもブロームである彼は、実物のホテルを見たことはないのだが。深い茶と白で塗られたその建物は、高級感と荘厳さを醸し出していた。

「あれ何だ？」

アルトがセレスティアに尋ねる。彼の視線もまた、フェリスと同じように前方の建物に向けられていた。セレスティアはアルトの視線の先を辿り、口を開いた。

「政府関係者の宿舎です。他の施設もほとんどあそこに入ってますけど」

「二ナたちもあそこにいるのか？」

アルトの問いに、セレスティアは深く溜め息を吐いた。

「たぶん、ですからね？ あそこじゃないなら、わたしにはもう分からないです」

少なくとも、修復の儀式を行う場所はある中に入っている。儀式に使われる——つまりは適応者の魂を奪うための道具も、建物のどこかに保管されているはずだった。ただ、セレスティアはそのことは口に出さないでいた。

不意に強い風が吹き、辺りの木々の葉が一斉にざわざわと揺れた。その揺れる緑の隙間から、後方にある白い何かが見えた。フェリスが上へと視線を向けると、そこにそびえ立つエターナルミラーがあった。柱の根元周辺は濃い霧で覆われているようだった。上へ行くほど、その形はくつきりと鮮明に見える。ブROOMから見たときと同じように、柱の遙か上部からは白いものがぱらぱらと舞っていた。しかし途中で消えてなくなっているのか、または単に霧で見えないだけなのか、それが下の方まで舞い降りるのは捉えられなかった。

「……結構近いんだ」

「え？ ……あ、はい」

フェリスはエターナルミラーを眺めながら小さく呟いた。セレスティアもその視線を辿り、柱に目を向けた。

「あれの周り……どうなってるんだ？ 霧が深い辺」

「……それは、分かりません」

「分かんないって？ 修復に行くんだろ？」

セレスティアは少し迷うような表情を見せた。少し俯いたあと、慎重に口を開く。

「エターナルミラーには、誰も近付けないんです。修復の儀式はここで行われます」

彼女が足を止める。既に例の建物——政府関係者宿舎の目の前ま

で来ていた。

「ずっと昔からたくさんの方が調査に行ってるそうです。でも、誰も帰ってこない。だから——今は禁忌とされているんです。近付きゃ、いけないんです」

「……」

「入りますよ。付いてきてください」

再び歩き出したセレスティアに続き、フェリスとアルトは中に入った。入り口には警備らしき男性がいた。剣と槍を携えたままではさすがに止められると焦ったが、予想に反して何も言われなかった。中に入ると、広いロビーのような空間になっていた。小さなカウンターがあり、その横にはエレベーターがいくつも並んでいる。ざっと見ただけで十台近くは動いているようだ。そしてその広さに見合う程度の人が行き来していた。いかにも役人といった雰囲気のスーツ姿の男女が多かったが、そうでない者も少なくない。堂々と刀や剣を背負っている者も多くいた。それでも火器と分かるものを所持している人が見当たらないのを見ると、銃の類は禁止されているのかもしれない。フェリスが見た限り、クライヴと同じ腕章を巻いているのはスーツ姿の年寄りばかりだった。

「あの、じゃあ、わたしはここまでです」

「ありがとな」

そう礼を述べたのはアルトだった。セレスティアは彼の方を振り返ってから、戸惑ったように視線を逸らした。

自分はお礼を言われるようなことはしていない。彼らをここまで案内したのは協力したかったわけでもなく、単純に二人を助けたかったわけでもない。セレスティア自身も自分が何を望んでいるのか分からなかった。禁止されているわけではないにしろ、自分の行動

はきつとクライヴに背いている。それに、連れてきた彼らを危険に晒すことになるのは明白だった。

フェリスとアルトの計画の詳細は知らない。そんなものないのかもしれない。ただ、少なくとも彼らは、今現在政府が特に神経質になっている事に対して抗おうとしているのだ。

「いえ……では、お気を付けてください、ね」

セレスティアは二人に一礼して、エレベーターの方へ向かおうとした。向きを変えた途端、彼女は人とぶつかった。セレスティアは反射的に「ごめんなさいっ」と口にする。相手は彼女より頭一つ分以上も背の高い人物だった。

「——遅かったなあ、セレス？　で、あいつらは何だ？」

聞き覚えのある、よく通る明るい声。セレスティアは恐る恐る顔を上げた。クライヴが自分のことを見下ろしている。

「あつ、ク、クライヴ様……。あの、その、これは……」

おろおろと目を泳がせるセレスティア。感情を隠すのは彼女にとって、とても苦手なことだった。

「まー、いいさ。とりあえず、今晩は来客用の部屋にでも泊めてやれ。随分お疲れみたいだしな。セレス、話はまた聞かせてもらっぜ」
「……は、はい」

怒られなかったこと、そしてフェリスたちを今すぐ追い返せと言われなかったことに対し、セレスティアはほっとしていた。「じゃ、行きますよ」と言いながら二人の方を振り返る。彼女は急に元気を

取り戻したようだった。

アルトがエレベーターに向かうセレスティアに付いて歩き出す。彼は終始クライヴの方をほとんど見なかった。フェリスもアルトたちを追ってエレベーターの方に向かう。そのとき、ほんの一瞬クライヴと視線が合った、そんな気がした。ひどく冷めていたように思う。多分敵意ではない。警戒心でもない。無感情、といった感じだった。

気づかれないように、もう一度クライヴの方をそっと振り返る。クライヴはフェリスの方を見てはいなかった。呑気そうな顔で、左右に伸びをしていた。

8 - 儀式三日前、その男

二ナは一人、深い霧の中に佇んでいた。空は明るい、周囲の景色は霞んでいる。数メートル先すらも見渡すことができない。

前方の霧の中に、人の影が見えた。その人影はゆったりとした足取りで二ナの方へと歩いてくる。近付くと同時に、徐々にはっきりとしたシルエットを成していった。

二ナのところまであと三メートル、という辺りでその人物は足を止めた。顔は見えないが、知らない人だった。ほっそりとした品のある女性だ。長いスカートの裾から白い足首が覗く。

「――」

彼女が何か言った。二ナにはその言葉が聞き取れなかった。

「――？」

再び彼女が何か言う。澄んだ綺麗な声だった。確かにその声は耳に届いているのに、彼女の言葉は聞き取れない。柔らかな声の響きだけを残して、二ナの中を通り過ぎていく。

「――」

「なに？　お願い、もう一度――」

そこで二ナは目を覚ました。

*

「アルト、二ナの居場所、見当ついているのか？」

「ついてるわけねえだろ。とにかく探して連れ出す」

「何の策もなく無茶言つなよ。見張りだっているだろうしさ」

「……しっ」

突然アルトは口元に指を当てた。フェリスは仕方なく口を嚙む。

エレベーターから降りてきたらしい、数人の男女の声がした。曲がり角の影からアルトはそつと彼らの様子を覗いた。

「あの男もいる」

そう言つてアルトは曲がり角から首を引く。フェリスとアルトは壁にぴつたりと付き、聞き耳を立てた。男女の会話の内容が耳に入ってくる。

「いやいや、流石だね。話には聞いていたが仕事が早い。ええと、何と言つたかな……」

「彼はクライヴです、長官。クライヴ・ロートレック、この若さにして実績もある、軍部の超有望株です。どうかよくしてやってください」

「ああ、期待しとるよ、ロートレック君」

「いや、俺なんか……。でも光栄です」

主に喋っているのは年配の男性二人だった。会話の内容から察するに、片方は政府の長官、もう片方はクライヴの直属の上官らしい。クライヴの声もちらりと聞こえたが、それ以上男性二人の会話に入り込む気はなさそうだ。

「でも、お凄いのねえ。あなた、まだ二四歳なのでしょう？」

続いて聞こえてきたのは年配の女性の声だ。喋り方は上品に聞こえるが、そのねっとりとした声質がなんとなく不快な印象を与える。

「公開模擬仕合のときも本当にお見事だったわ」

公開模擬仕合、というのは軍部が毎年開いている剣の腕を競い合う行事だった。剣の腕といっても、銃器など一部の武器を除いた、剣以外の武器の使用も認められている。他に難しい決まりはない。専用のアリーナにて、一対一で戦うのだ。軍部の訓練の一環だが、政府に対する見世物という側面が大きい。そこで実力を認められれば、一気に昇格するチャンスでもある。

クライヴはまさしくそのようにして地位を得ていた。彼が政府の軍に入ったのはまだ一八の時だ。しかし直後に行われた模擬仕合でクライヴは周囲を圧倒した。もちろん個人の戦闘能力だけが、軍人としての器量ではない。それでも彼の強さは群を抜いていた。大振りの剣一本で、当時の統帥をも華麗に薙ぎ払った。そうして軍部から政府直属に引き抜かれたわけだが、その後は指揮官としての統率力も遺憾なく発揮した。問題といえば、二四歳と非常に若いクライヴの下に付くのを良く思わない部下がいることぐらいだろう。

「本当に末恐ろしいのが出てきたものだな」

長官らしき男性が言う。嫌味な言い方ではなく、寧ろ上機嫌に聞こえた。

「ところで例の鏡の娘はどこにいるのかね？ 私も一度会っておこうと思うんだが」

「彼女なら最上階の部屋に。長官でしたらいつでもお通しします」

「そうかそうか。では明日にでも行ってみよう。この世界を救う鏡

になるのだからね。ぜひ一度拝んでおきたい」

彼らの声が、徐々にフェリスたちから遠ざかっていく。やがて完全に聞こえなくなった。

「……あいつ凄いんだな、クライヴ」

フェリスはそう言って、同意を求めるようにアルトの顔を見る。アルトは不機嫌そうに眉を寄せていた。ちらりとフェリスの顔を一瞥したが、すぐに視線を背ける。それからアルトも呟いた。

「最上階……行くぞ」

*

しんと静まり返る部屋で、セレスティアは無言で立ち尽くしていた。フェリスとアルトに充てられたその部屋は、彼女が来たとき既にもぬけの殻だった。

クライヴに念を押された通り、入り口の扉はきちんと外から施錠した。が、部屋に入ってみれば全開の窓。カーテンが大きくはためている。

「ここ、八階ですけど……」

セレスティアは小さく溜め息を零した。

9 - 儀式二日前、『鏡』

「じゃあ、明後日、エターナルミラー修復の儀式でまた会おう。君は世界を救う『鏡』になるんだ。誇りを持つんだよ」
「……はい」

年配の男は部屋の外へ出ていき、扉がぱたんと閉まった。

二ナは再び一人きりになった部屋で深く息を吐く。彼は政府の長官らしかった。長官ということは、民主主義ゆえ絶対的権力は持たないものの、王と並んでこの国のトップということだ。この世界は一つの国だけで成っていた。だから国名というものもない。そして王室は実際のところ政治にはあまり関与していない。つまり彼が国の、世界のトップだといえた。

彼の話は「鏡になることに誇りを持て」という内容に終始した。エターナルミラーの修復がどれだけ大切な。世界を救う『鏡』はどれだけ偉大な存在か。彼はどうやら、「君の命一つごときで世界を救えるとはなんと素晴らしい！」と言いたいらしかった。二ナはそれを間違いだとは思わない。命の重さは量れないと言っけれど、一人の命と世界中の人の命のどちらが大切かなど目に見えている。それでも彼の話は二ナを悲しい気持ちにさせた。

自分の命を擲^{なげう}つてまであの人を助けたいなんて思えない。自分こそ今まで天使のような心を持った人間ではないのだ。それでも二ナは『鏡』になる決意を曲げることはなかった。少なくとも自分には生きてほしい人がいる。二ナは静かに目を閉じた。

頭の中に浮かぶ人たちの笑顔。ずっと育ててくれた、養父でもある神父さん。自分を慕ってくれるブROOMの子どもたち。村のお節介なおばさん。無口だけど優しいフェリスのお父さん。アルト。そ

して——最後にはフェリスの満面の笑みが二ナの頭に浮かんだ。

*

「まったく！ 昨日はどうかろうついてたんですか！ 今日はこちらで大人しくしてくださいよ！ それか、帰ってください！」

フェリスとアルトはセレスティアに説教を食らっていた。正直彼女に怒られてもあまり強くくることはない。アルトは仏頂面で窓の外を眺めていた。その彼が急にセレスティアに顔を向け、口を開いた。

「あいつに、クライヴに会わせろ」

「な、何をいきなり！ ために決まっています！ しかもなんでそんな偉そうなんですか！」

「会わせろ」

どうしたら二ナに会えるのか。アルトはそれをずっと考えていた。セレスティアは二ナの居場所を知らないようだし、結局浮かんだのは信用のできないあの男だった。協力を頼める相手だとは微塵も思っていないが、多少の情報は得られるかもしれない。どういう目的があるのか怪しいが、ここに入り込んだ自分たちを追い出しはしなかったこともある。

「会わせろ」

「だめです」

「会わせろ」

「俺も頼む」

「無理ですってば……」

「頼む」

「セレスティア！」

セレスティアは深い溜め息を零した。

「——だめです！勝手に入っちゃいけません！本当に怒りますよ！」

「じゃあなんで連れてきたんだよ」

「そ、それは……っ」

アルトの一言でセレスティアはもごもごと口を閉じた。フェリスとアルトはクライヴの部屋の前にいた。あのあと結局セレスティアは自分たちをここに連れてきたのだ。

中に入ってみると、クライヴの姿はなかった。室内は予想以上にすっきりと整頓されている。いや、整頓されているというよりは単に物が少ないだけかもしれない。

「ほら、クライヴ様もいませんし、戻りますよ！」

セレスティアが甲高い声で怒っている。クライヴが留守ならそれは仕方ないか、とフェリスが思ったときだった。

不意に、アルトは何かを見つけたように窓際の小さなデスクへと向かった。彼はそこに置かれた何かを手取る。フェリスが後ろから覗き込むと、それは額縁に入れられた一枚の写真だった。若い男女が写っている。

よく見てみると、男の方はクライヴだった。勝ち気な笑みを浮かべ、女性の肩を抱き寄せている。今よりやや若く見えた。髪も少し長い。

「すげえ……綺麗な人だな」

女性の方へ目を移したフェリスは思わず呟いた。肩までの美しい金髪。くつきりとした二重瞼に、整った形をした小さめの鼻と口。輪郭は女性らしい自然な曲線を描いている。上品な薄い青紫色のカラーデイガンがよく似合っていた。歳は分らない。十代の少女のようにも見えるし、ずっと大人の女性にも見える。きつと真顔だったら凜とした、強い雰囲気をもった女性なのだろうと思う。でも写真の中の幸せそうな彼女の笑顔はとてもあどけなく、可愛らしかった。

「その方は、アイリス様です」

フェリスたちの様子を見ていたセレスティアが言う。フェリスは彼女の方に顔を向けた。アルトは無表情でじっと写真を見つめている。

「もしかしてクライヴの？」

彼女か、という部分は省略してセレスティアに聞き返す。もしかしてと言ったものの、寄り添う二人の姿から間違いなく恋人だろうという確信はあった。クライヴの方はともかく、相手の女性の方は遊ぶようにも遊ばれるようにも見えない。セレスティアも否定する様子はなかった。

しばしの沈黙を挟んでから、セレスティアは小さく零した。

「……アイリス様は、現在の『鏡』であるお方です」

写真をじっと見ていたアルトが彼女の方に顔を上げる。

「『鏡』って……」

「ニナさんと同じです。……三年前、エターナルミラーの修復のため亡くなりました」

アルトは無表情のまま、再び写真に視線を落とした。フェリスも同じように写真の中の女性——アイリスを見つめる。なんとなく、どこかで彼女を見たことがあるような気がした。

地上一五階。政府関係者の個室をいくつか通り過ぎると、別棟へと繋がるガラス張りの渡り廊下が続いていた。そのすぐ手前にある小さな休憩スペースで、アルトは探していた人物を見つける。その人物は外を展望するように立っていた。クライヴ・ロートレック。アルトはその名前まで記憶していた。今日はあの大層な剣を携えていない。

気配に感付いたのか、クライヴはアルトの方を振り返った。何の用だという怪訝そうな表情をしているが、驚いている様子はない。

「……あんたの恋人のこと聞いた。なんでそのあんたが『鏡』なんて――」

そう口を開いたアルトに、クライヴは冷めた視線を向けた。どこで情報を仕入れてきたと言わんばかりの目だ。やや間があってから、クライヴは怠そうに息を吐く。

「セレスか」

口が軽くてどうしようもねーなあ、まったくあいつは。クライヴはそんなことを言いながら呆れたように笑う。

「……何でそんなへらへらできんだよ。あんたは大切な人殺されてなんとも感じないのか」

「別に殺されたわけじゃねえよ。彼女が自分で望んだことだ」

「結局は見捨てたんだろ、あんたが」

アルトは少しだけクライヴに期待していた。気に入らない男だったが、彼の恋人が現在の『鏡』だと知り、本当は彼は二ナを守りたい気持ちを分かってくれるんじゃないか——そんな風に考えていた。だから、クライヴの態度に裏切られたような気がした。否、本を正せば、こんな人間を買い被った自分が悪いのだが。

「じゃあお前はあれか？　みんなで仲良く世界と一緒に消えましょー、とでも言うのか？　はつきり言っぜ。そりゃただの馬鹿だ」

クライヴがそう口にすると同時に、アルトは彼に掴みかかっていた。彼の言葉だけではなく、平然とした態度でつらつらと並べるその態度に我慢できなかった。クライヴは僅かに驚いた表情を見せたが、すぐに元の気怠げそうな眼差しに戻る。アルトが相手の胸座を掴んでいるが、身長差もあり、クライヴは完全にアルトを見下ろしている状態だった。

「俺は……あんたとは違う。二ナを見捨てない、死なせもしない。世界を守るっていうなら、……他の方法を探す」

「……へえ」

噛み締めるように少しずつ紡ぐアルトに対し、クライヴは馬鹿にしたようにわざとらしく目を細めてみせた。

「あんた……ホントに最低だな」

「合理的って言えよ」

「あんたみたいなやつが死ねばいいんだ」

「もし俺が死んで世界が救われるっていうんなら、何回でも死んでやるぜ？」

そう言って、アルトを嘲るようににやりと笑みを浮かべる。憎悪

は増すばかりだったが、アルトはクライヴから手を離れた。自分の方が馬鹿らしくなってくる。クライヴはアルトに掴まれていた辺りを軽く手で払ってから言った。

「死に目ぐらい立ち会わせてやろうと思って、ここにおいといてやったんだけどな。……お前、厄介そうだわ」

クライヴは「おい」と声を上げる。それはアルトに向けられたものではなかった。姿を見せたのはスーツ姿の男二人だった。まだ若そうだが、それでもクライヴよりは年長だろう。

「こいつ、外につまみ出せ」

アルトは咄嗟に、背中の槍に手を掛けようと腕を伸ばす。だが間に合わず、そのまま片方の男に体を取り押さえられた。

「それから、その壁際に張り付いてるやつもな」

アルトにはそれが誰のことか分からなかった。もう一人の男が向かった先を振り返る。地味な悲鳴が聞こえた。

「お前……フェリス！」

「ごめん……」

フェリスは肩を竦めてみせた。フェリスの後ろにはセレスティアの姿もあった。どうしたらいいのか分からない様子でおどしている。どうやら二人で聞き耳を立てていたらしい。

「とっとと田舎帰れ。これ以上うろつろするともう無傷じゃ済まねーぞ。……早く連れ出せ」

クライヴの声が響く。男たちは素早くアルトとフェリスを引きずるようにエレベーターに乗り込んだ。一五階にはクライヴとセレスティアだけが残される。セレスティアは怯えた目でクライヴの顔を見上げた。

「……お前も邪魔だ、セレス」

一瞬目を伏せてから、セレスティアも逃げるようにその場をあとにした。

一人きりになった静かな空間。「あんた、最低だな」——アルトの言葉が頭の中に蘇った。

*

二人は宿舎の裏口から外に放り出された。その扉を何度も揺さぶったが開かなかった。もう正面の入り口から入れるわけもない。

「くっそ……でもなんでお前まであそこにいるんだよ」

「ニナの居場所を探してたんだ。彼女に協力してもらって」

「で、分かったのか？」

「いや……でも儀式の場所は分かったし、それに——」

そう言ってフェリスが取り出したのは一枚の図面だった。細かい部屋や柱の位置が書き込まれている。この政府関係者宿舎の造りを示すものらしい。

「あそこから入れば中に繋がってるはずだ」

フェリスは地下へのマンホールを指差し、地図上の宿舎内への道を指でなぞってみせた。

「アルト……修復の儀式ってやつは明日の正午らしいな」
「……そうか」

二人は無言で視線を交わす。そうして互いの決心を確認し合った。

11 - 儀式前夜、それでも私は貴方の傍にいたいと願うのです

その晩、クライヴの自室のソファには、ひどく荒んだ彼の姿があった。グラスの中の酒を一気に喉の奥に流し込み、空になったグラスを乱暴にテーブルに戻す。既にテーブルの上には、空けられた酒の瓶が何本も並んでいた。

「……………くそ……………俺は……………」

ソファに仰向けに寝転がる。右手で自分の顔面を掴むように覆った。あれはどうしたって避けられないことだったのだと、無理矢理自分を納得させて今まで過ごしてきた。それなのに、アルトに言われた言葉が異様に耳に残っている。

何も考えたくなくて酒に縋ったが、少しも楽にはならなかった。単に吐き気が増していくだけだ。

「俺……………馬鹿だな……………」

絞り出すように声を漏らす。——最低だ。自分は最低な男だ。

*

「どこに置いてきちゃったんでしょうか……………」

深夜、セレスティアは政府関係者宿舎の廊下を歩いていた。日付はとつくに変わっている。

書きかけの報告書をどこかに失くしてしまった。ずっと自分の部屋を探していたが結局見つからず、昼間立ち寄った場所探しに行

くことにしたのだ。外に探しに行くべきか否か、散々迷っていたらこんな時間になってしまった。

「クライヴ様、わたし見つけます、ちゃんと……！」

彼女には度重なる書類紛失の前科があった。怒られるのはもちろん嫌いだ、今はこれ以上クライヴに愛想を尽かされるようなことをしたくない。「邪魔だ」なんて言葉を彼から言われたことは今まで一度もなかった。そんなことで、と自分でも驚いたが、あのときには涙が出た。

眠気を振り払いながら足を急いでいると、その途中に、こんな時間だというのに明かりの点いている部屋が一つだけあった。その部屋の前でふと足を止める。そこはクライヴの部屋だった。物音を立てないように明かりの漏れている扉に近付くが、中からは何の音も声もしない。ノブにそっと手を触れ、軽く引いてみる。鍵はかかっておらず、扉はあっさりと開いた。

「えーっと、お邪魔しまーす……」

小さな声で侵入の言い訳をしつつ、クライヴの部屋に足を踏み入れる。部屋に入った途端、思わず鼻を押さえた。酒の臭いが部屋全体に立ち込めていたのだ。その中で、セレスティアはソファでぐったりとしているクライヴを発見した。

「ク、クライヴ様っ！？ ちょっと、し、しっかりしてください！大丈夫ですか！？」

慌ててクライヴのもとに駆け寄り、彼の肩を揺さぶる。クライヴは小さく呻いた。とりあえず生きている、とセレスティアは胸を撫で下ろす。

「よかった……！ クライヴ様！ ちゃんとベッドで寝ますよ！
立てますか？ ほら、立ってください！」

セレスティアは半ば無理矢理クライヴの上半身を起こし、立ち上がるよう促す。酒臭い彼の呼気を至近距離から浴び、思わず顔をしかめた。朦朧としながらクライヴは腰を上げたが、彼の目は完全に閉じられたままだ。ふらふらと歩くクライヴの体を支えながら、ベッドへと誘導する。ベッドに辿り着いた途端、クライヴはそこに倒れ込んだ。

「……もう、一体どうしちゃったんですか。朝また来ますから。……
……おやすみなさい」

何があつたのかは分からないが、クライヴのこんな姿を見るのは初めてだった。セレスティアの知る限り、彼は酒に飲まれるような人間ではない。クライヴの体にそつと毛布を掛け、部屋から出ようと踵を返す。

そのとき、突然手を掴まれた。驚いて振り返る。自分の手を掴んでいるのはクライヴだった。彼の大きな手はしっかりと、引き止めるようにセレスティアの手を握っていた。クライヴの口が小さく動く。

「——……アイ、リス……」

ほとんど息遣いのみでまともに声も出ていなかったが、セレスティアはクライヴのその言葉を確かに聞き取った。

しばらく黙ってその寝顔を見つめてから、セレスティアは優しい手つきでクライヴの手を解いた。「おやすみなさい」と小さく口にして部屋を後にする。明かりを消し、外に出て、それから静かに扉

を閉めた。ここで生活しているのは関係者だけだ。鍵はあまり気にしないでいい。

セレスティアはクライヴに手の温もりを感じたとき、幸せだった。朦朧とした意識の中で、彼が見ていたのが自分ではないことぐらい痛い程分かつている。それでも嬉しかった。

それと同時に、セレスティアははっきりと理解した。クライヴにとって、唯一無二の存在となり得るのは彼女以外にいないのだと。自分は彼とどうなりたいとか、そんな大それたことを願ってなんかいない。そう思っているつもりだったが、その事実を改めて思い知ると堪らなく苦しかった。

「アルト、お前平気なのか？」

「何が？」

「腕だよ」

ああ、とアルトのぶつきらばうな返事が返ってくる。狼に襲われ怪我を負ってからまだ一週間だ。服の上からは分からない程度にはなっているが、完治したということはありえないだろう。

「心配ない。もうこいつを振り回せるくらいにはなってる」

心中を見透かしたようにアルトは言い、同時に背負った槍を右腕で軽く握ってみせた。

二人は地下水道を通り抜け、ボイラー室から宿舎内に入り込んでいた。幸いなことに、ここに来るまでの間ほとんど政府の人間と出くわすことはなかった。少ない見張りにも見つからずにやり過ごすことができた。だがここからは話が違う。エターナルミラー修復の儀式とやらにはどれだけの数の人間がいるのか、どういう体制の中に二ナはいるのか——フェリスたちに知る術はなかった。それでも自分たちがしようとしていることに筋道が立っていないことは分かっている。

「俺ら、結構無謀なことしてるよな」

アルトに対して自嘲気味に呟く。今更やめるとかそんなことを言うつもりはない。フェリスも既に覚悟は決めていた。この期に及ん

だらもう二ナを連れ出す以外考えられない。

「だな。……時間がない。急ぐぞ」

アルトの言葉に、フェリスは軽く顎を引いた。儀式の開始は正午からだっただけだ。時計は既に十一時五〇分を指していた。

*

関係者宿舎の一角に建造された大きな聖堂。その中は厳かな雰囲気包まれていた。まだ儀式は始まっていないが、既に正装姿の政府関係者が多く集まっている。中には招待された王族や、他の貴族の姿もあった。

しかし、そこにクライヴの姿はない。セレスティアは今朝早くに彼の部屋を訪ねたが、扉には鍵が掛けられていた。

「今回は早かったですね」

「ああ……次は長く保^もつてくれるといいのだが」

セレスティアの耳にそんな会話が入ってきた。言葉を交わしているのは最前列にいる長官とその秘書だ。

早いというのは『鏡』の交代の周期、つまり前回の儀式で彼女——アイリスの命が絶たれてから三年。セレスティアにはそれ以前のことは分からなかったが、三年というのは比較的短い方に入るらしい。

政府は『鏡』になることは死ではないとしていた。『鏡』となった者の魂は体を離れ、エターナルミラーへと向かう。そしてエターナルミラーの一部となって永遠に生き続けるのだと、そうされていた。それが真実か否かは分からない。しかし三年前、アイリスが”

殺される”瞬間をセレスティアは確かにその目で見ていた。彼女だけでなく、そのとき出席していた他の者たちも、そしてクライヴもそれを理解しているはずだった。この儀式が一人の人間の生を奪うことは紛れもない事実だった。

それでもセレスティアにはどうすることもできなかった。世界を存続させるのには、きっとやむを得ないことなのだから。

聖堂内に鐘の音が響き渡った。時刻が変わったことを告げる、聖堂の時計の音だ。聖堂内は一気に静まり返った。

鐘の音が鳴り終える前に、中央の扉がゆっくりと開いた。他の出席者が入る扉とは異なる、主賓が入場するための扉だ。大きく分厚い扉は時間を掛けてようやく完全に開いた。

出席者全員の視線が集まる中に姿を見せたのは真っ白な衣装に身を包んだ二ナと、二人の聖職官だった。装飾はないが、輝くほどの純白。露出された二ナの肩もまた白かった。セレスティアの目には、それが皮肉にも花嫁衣装のように映った。

三年前のあの日、アイリスもまた二ナと同じ純白の衣装を纏っていた。彼女の元々持つ雰囲気のせいかもしれないが、単に清楚なだけでなく、本当に華やいで見えた。その美しさに目を奪われ、憧れに近いものを強く感じたのを鮮明に覚えている。ただしこのとき、セレスティアは修復の儀式の意味を完全に理解していなかった。

「ただ今より、エターナルミラー修復の儀を開始する」

聖職官の片方が厳かな口調で宣言する。

「二ナ・ファビウス。貴殿はこれより『鏡』となる。エターナルミラーの一部となることで、貴殿は永遠を手に入れるであろう」
「はい」

静かな聖堂内に二ナの返事が響いた。小さいが、落ち着いた声だった。

セレスティアの脳内に再び三年前の記憶が蘇る。アイリスは返事をする代わりに、ゆっくりと深く頷いた。その仕草さえも優美で上品だった。

聖職官の誘導で中央の台に寝かされたときも、彼女はいたって普段通りで静かだった。彼女を囲う燭台に火が灯され、聖職官が用意されていた大剣を手に取る。『リペアソード』と呼称されているものだ。エターナルミラーと対になるものとして、遙か昔の時代から受け継がれているらしい。いかにも立派な外見の単なる剣だが、人や物を斬ることができないという最大の特徴があった。この儀式のためだけに用いられる道具だ。

聖職官がアイリスの胸の上に剣の切っ先を向け、彼女は静かに目を閉じた。彼女は結局、終始誰にも——クライヴにすらも視線を向けることはなかった。誰に見るでもなく、ただじっと前を見つめていた。

『リペアソード』がアイリスの胸を完全に貫いたのは、その直後だ。音もなく、銀色の剣がアイリスの胸に突き立てられた。聖堂にいた者のうち、ごく少数が息を呑むような声を上げた。セレスティア自身もその一人だった。が、ほとんどの者は何のリアクションも見せなかった。クライヴも無言のまま、じっと前を睨んでいた。

間もなく剣が引き抜かれたが、アイリスの体からは僅かの出血さえなかった。『リペアソード』の刃で人や物を傷つけることはできない。だから胸を貫かれたはずの彼女の体は無傷だった。しかし、ただ眠っているだけのように見える彼女が目を覚ますことはなかった。

こうして、アイリスは死んだ。

がしゃん、という冷たい音と同時に、二ナの胸の上に剣が構えられる。二ナは覚悟を決め、静かに瞼を閉じた。

「痛みはない」というようなことを今日までに何度も言われたが、そんな言葉は何の慰めにもならなかった。ただ身近な大切な人に生き続けてほしい。二ナの覚悟を支えているのはその思いだけだ。

剣の先がゆつくりと下ろされ、二ナの胸元に触れる。そのとき、突然聖堂の大扉が開いた。

「やめろ！」

乱暴に扉を開け、聖堂に飛び込んできた二人の少年に居合わせた全員の視線が集まる。

「フェリス、アルト……」

目を開けた二ナは思わず呟いた。他の出席者同様、彼女もただ啞然としていた。

フェリスとアルトはそれぞれ武器を構えていた。騒然とする聖堂内の人々の横目に、フェリスが二ナの元まで寄ってくる。二ナは戸惑いながら上半身を起こした。

「フェリス……何しに——」

「逃げるぞ」

そう言って、フェリスはアルトと視線を交わした。

幸いなことに、聖堂内の人間で武器を持っているのは二人の見張

りのみだった。きつと持ち込みを禁止されているのだろう。

「逃げるって……ちょっと」

「——と、捕らえる——！」

今まで呆然とした様子だった聖堂内の人間が、我に返ったように声を上げる。それを合図に番人二人が、二ナの傍にいるフェリスに向かつていった。携えた槍を構える様子はない。とりあえずは穏便に拘束しようとしているのが分かった。

フェリスは剣を構えようとしたが、それよりも早く、アルトが間を割って番人の前に立ちはだかる。

「いいから二ナを連れ出せ！」

フェリスは二ナの手を掴んで外へ向かおうとした。しかし、二ナはそれを拒んだ。燭台の一つに掴まり、その場に足を踏ん張る。振り返って急かそうとするフェリスに対し、口を開いた。

「……何しに来たの」

「助けに来たに決まってるだろ。早く——」

「頼んでない」

二ナはぴしゃりと言い放った。必死の思いで助けに来たフェリスやアルトに対しての、あまりにも情の無い冷たい言葉。二ナはさらに続けた。

「自分の意思で決めたことなの。迷惑なことしないで。……皆さんに謝って。そうしたらすぐに帰って」

そう言って、強い眼差しをフェリスに向ける。

フェリスがブROOMからこんなところまで追ってくるとは思って
もみなかった。行動を起こさせたのはアルトの方だろう。フェリス
はそういうタイプじゃない。だからブROOMを発つ前に話したのだ。
助けられるためじゃない、助けるためにここに来たのに、一瞬喜ん
でしまった。これは喜ぶべきことなんかじゃない。

「皆さんに謝りなさい」

もう一度そう繰り返す。今ならまだ「ごめんなさい」の一言で済
む状況だ。このあと儀式が順調に終わりさえすれば、フェリスたち
は許されるだろう。相手は国家なのだ。市民に対し、必要以上の制
裁を加えるような真似はできないはず。

それに対し、フェリスは一瞬戸惑ったようにアルトの方へ目を向
けたが、謝罪しようとはしなかった。二ナに向き直り、真っ直ぐに
彼女を見る。二ナはフェリスの意向を理解した。彼女が次の言葉を
発しようとしたとき、隙ありと踏んだのか、前列にいた出席者の一
人がフェリスの剣を奪いにかかった。反射的にフェリスは迎撃した。

「ぐあつ、うあああああああ！」

初老の男の悲鳴が響く。あまり聞き心地の良いものではない。そ
れを見た周囲からも悲鳴が上がる。

「あ」

フェリスは呟いた。年恰好から見ても、相手は政府のお偉いさん。
まずい状況だが、裏を返せば後戻りのしようがなくなった、とも言
える。

「ほら二ナ……逃げるぞ」

負傷者発生の混乱（負傷者を出したのは他ならぬフェリスであるが）に乗り、二ナの手を強く引く。たとえ彼女が拒んでも、今度は無理矢理引っ張るつもりだったが、二ナは力が抜けたようにあっさりとは引かれた。

武器を持たない観客たちは積極的に妨害してこない。そのため聖堂の扉の前までは辿り着くことができたが——一人の門番が進路を塞いだ。

フェリスの振るう剣を、門番は槍の柄で受け止めた。余裕といった様子だ。力の差が明白ということもあつてか、相手に殺意はなさそうだが殺されなければいいと、そんなふうに済ませることはできない。倒すまではいかなくとも、無事に逃げ切る必要があるのだ。

「く……っそ……」

相手の押す力に剣が弾かれそうだが、アルトの方も間合いを取って踏ん張っているが、大丈夫とは言えない状況。さらに、フェリスはより絶望的な光景を捉えた。目の前にいる番人の後方、扉の向こうからやってくる男の集団を。自分たちを捉えるために派遣された者たち、という以外に解釈のしようがない。

案の定、門番と対峙している横から数本の刀が突き付けられた。どうやら剣を退けということらしい。アルトの方も同じ状態だ。そして扉の前は数人が塞いでいる。

「フェリス……」

二ナが小さく声を漏らす。不安そう、というよりはとても申し訳なさそうな声だ。

状況は絶望的。ここから挽回して逃げ切るなど不可能だ。これ以

上下手に足搔いてこの場で殺されるよりは、諦めて、素直に謝って、それなりの裁きを受けるのが賢明なのだろう。そうして二ナは——死ぬ。でもどうしようもない。足搔いたところで自分に彼女は助けられない。自分は何をしに来たんだろう、と今更ながら思う。自分たちがここに来たせいで、二ナは無意味に罪悪感まで背負う羽目になったのだ。

「……ごめん——」

フェリスがそう呟いたのと同時に悲鳴が上がった。何かと、声のした方に顔を向ける。驚いていたのはフェリスや二ナだけではない。番人も、フェリスに刀を向ける軍人たちも声のした方を見た。扉の前を塞ぐように並んでいた男たちが、揃って倒れていた。完全に気を失っている者もいれば、悶絶して呻いている者もいる。

「まったく、無謀なことするもんだ」

彼らの後ろから男の声がした。呆れたような響きと同時に、どこか馬鹿にするような口調だ。その声の主は聖堂内にゆっくりと歩み入った。大振りの剣を担いだ、背の高い男だ。聖堂内を一瞥してから、余裕のある、何とも生意気な笑みを浮かべた。

「随分と派手なことやってるじゃねーか、アルト、フェリス」

扉の前を塞いでいた軍人たちをあつさりと蹴散らし、聖堂内に悠々と現れた男。フェリスは彼の顔に見覚えがあった。

「あんたは——」
「クライヴ様っ！」

フェリスが相手の名を口にするよりも早く、別の声が響いた。啞然としている人々を掻き分けるようにして、一人の少女が後ろから出てくる。銀色の癖毛を青いリボンで二つに括った、小柄な少女。クライヴは彼女の顔を見て、再びにやりと笑みを浮かべた。

「おう、セレス！」
「クライヴ様、どうして!？」

少女の言葉に対してクライヴが口を開きかけたときだった。人々がざわつき始める。

「おい、クライヴって……」
「どういつつもりだあいつ……」
「彼、政府の人間でしょう? どうなっているのあなた……?」

「ロ……ロートレックくん! 君は自分のしていることが分かっているのかね……!？」

そう口にしたのは例の最高長官だった。声がわなわなと震えている。それが怒りによるものなのか、混乱からくるものなのかまでは

分らない。クライヴは彼の方に顔を向けると、わざとらしく片眉を曲げてみせた。

「そりゃあ……やばいつすよねー」

「真面目に答える！ 君は政府の高等管席でありその自覚と誇りを

――」

「セレス」

長官の言葉を見無視し、クライヴは前を向いたまま少女に呼びかけた。突然名前を呼ばれ、セレスティアは驚いたように顔を上げる。

「は、はい、クライヴ様」

「お前はどつする？」

「はい、え、えと……はい？」

セレスティアは意味が分からないというような、困惑した表情を見せた。クライヴは彼女の方に視線を移すと、軽く顎を持ち上げて下目にセレスティアを見た。そしてそれがデフォルトだともいうかのように、いつもの妙に自信に溢れた笑みを浮かべる。

「一生追われながら生きる覚悟はあるかって聞いてんだ」

傍から見れば何のことやら、という感じだが、セレスティアはその言葉だけで十分理解した。彼女の洞察力が人並み外れているわけではなく、相手がクライヴであるからこそ伝わったのだろう。

「も、勿論です！ 当たり前です！ わたしは……クライヴ様のいるところなら何処へだって付いていきます！」

「よし」

クライヴは短く答え、深く頷いた。気付けば人々のざわめきは止み、聖堂中の視線がクライヴに向けられていた。フェリスもアルトも、二人を取り囲む政府の軍人たちも、そして二ナも、誰も何も声を発しない。そして誰一人動かない。その中でクライヴが一人顔を動かし、口を開いた。まずフェリスの方に視線を向け、そのままアルトへと移す。

「フェリス、アルト、えーと、あんたは——二ナ・ファビウス。準備はいいな……よし、いっちょ逃げるぞ！」

クライヴの言葉に、フェリスとアルトは顔を見合わせた。状況が飲み込めていないのは政府側の人間だけではない。フェリスたちにもクライヴの真意など見えなかった。ただし、とりあえず現在の状況から言うならば、自分たちにここから逃げる以外の道は残されていない。そして彼は自分たちを連れて逃げるつもり——らしい。

「何ぼさつとしてるフェリス！ 早く彼女連れて出る！」

フェリスは二ナの手を引いて聖堂の出入り口へと向かった。フェリスを取り囲む軍人たちは、クライヴの方を見たまま動こうとしない。扉の前でひっくり返っている軍人たちを避け、聖堂から宿舎内に出た。すぐにアルトも追いつく。

「な、何をしているのかね！ 早く、追え、追え！」

フェリスたちが消えた直後、聖堂内で声を上げたのは長官だった。フェリスとアルトを突っ立ったまま見送ってしまった部下たちに対し、声を荒らげながら無意味に手を振り動かす。

「追えと言っておるだろう！」

軍人たちが扉の方へと動き出す。クライヴは余裕のある足取りで彼らの行く手を塞いだ。少々細身な彼一人が立ちはだかっただけでは人が通れるくらいの空間は十分にある。当然と言えば当然だが、軍人たちはクライヴと剣を交えようとはせず、ごく自然に彼の横を過ぎようとした。

「悪いな」

軽い調子でクライヴは呟く。と同時に彼は剣を大きく一度だけ振った。軍人たちはフェリスたちを追っているとはいえ、クライヴに対して無防備だったわけではない。手にした各々の刀でクライヴの剣を防ぐ――が、彼は眉一つ動かすこともなく、彼らを薙ぎ払った。その音からすると相当の重量のある剣らしい。勿論こんな程度で軍人たちが死ぬわけもない。しかし、彼らは動きを止めた。それは目の前にいるこの男――クライヴに対して怖れをなしているからに他ならない。

「何をしている、やれ、早く連れ戻せ！」

長官が再び喚く。怯んで動きを止めていた軍人の一部がクライヴに刀を構えようとした。それを察知したクライヴは小さく息を吐き、口を開く。

「もういい加減、遊んでられねえな」

軽く顎を引き、相手を一瞥した。人を小馬鹿にしたようないつもの笑みはない。

「こつちも時間ねーんだよ。これ以上ってんなら本気でやらせてもらう」

クライヴは目を細め、剣を持ち上げた。

無論、相手を見くびって脅しているわけではない。退いてくれれば都合が良いが、殺した方が早く済むならそうする——それだけのことだ。

「やれ、すぐに鏡を連れ戻せ！」

軍人たちは動かなかった。長官の命令を無視するつもりはないのだろうが、迷っている様子だった。クライヴという男をよく知っている人間であれば、それが賢明な判断だというのは間違いないだろう。

そんな軍人たちの様子を見て、クライヴは満足したように一瞬表情を緩めた。

「セレス、行くぞ。……悪いな、おっさん。俺やっぱこーゆーところ合わねえんだよ」

セレスティアと長官に言葉を掛け、クライヴは聖堂の扉を潜る。

啞然とした人々の中からセレスティアも飛び出し、クライヴの後を追っていった。

「……今すぐ総部隊を招集せよ。『鏡』を何が何でも連れ戻すんだ。あとの者はどう処理しても構わん」

聖堂内に長官の低い声が響く。苦々しい顔で扉の向こうを睨んでいた。

「クライヴ・ロートレック……。あの男……。ただでは済まさんぞ」

「ジャン、早くおし！ 日が暮れてしまっわ！」

主要都市を結ぶ街道。田舎とはいえ忙しく人が往来する中で、女の鋭い声が響いた。彼女の少し後方、声が向けられた先にいたのは大柄な男だった。飾り気のない白いシャツの上からでも、その筋肉の盛り上がりがはつきりと確認できる。カーキ色の長ズボンには薄汚れていた。ジャンと呼ばれていたが、正しくはジャン・ジャック・ダルデンヌというのが男の名だった。お世辞にも美男子とは言い難い強面。どちらかといえば醜男ぶおとこの部類に入るだろう。浅黒い肌と無精髭のために老けて見られがちだが、まだ二十二歳の青年である。

ジャン・ジャックはスーツケースを三つ積み上げた程の大きな荷物を背負い、積み荷用の一輪車を押していた。一輪車には食糧らしき袋や薪などが雑に積まれ、さらにその上にはテントを張るためと思われる鉄の支柱が何本も載せられている。

彼が急ごうと一輪車を押す力を少しだけ強めたとき、一輪車のタイヤが少し大きめの石に乗り上げ、全体が傾いた。ジャン・ジャックは慌てて一輪車の角度を正す。彼の剛力を以てすれば造作もないことだ。――が、彼が向きを戻すより先に、鉄の支柱が一本二本と転がり落ちていく。ガランガランと、賑やかな音が響いた。

「全く……何をしているのかしら。急ぎなさい、私は暇ではないのよ。お分かり？」

大袈裟に溜め息を吐きながら女はジャン・ジャックの元に歩いてくる。彼女の抱える荷物はあまり多くない。一般的な大きさの鞆を肩に掛け、弓と矢筒と思しきものを背負っている。無論彼女の荷物がこれだけのはずはなく、大半はジャン・ジャックの背負う方に入

っているのである。

「すまない……」

ジャン「ジャックは心底申し訳なさそうに言い、一輪車をそつと下ろしてから支柱を拾い始めた。

女は初め仁王立ちでジャン「ジャックを見下ろしていたが、やがて傍らの小さな杭に腰を下ろした。臙脂色に金刺繍えんじの施されたロングワンピース。胸から腰、そして腰から臀部に掛けての体のラインが強調されるデザイン。中でも視線を引き寄せられるのはその胸元だ。大きく開いたワンピースの胸元からは豊満な乳房の谷間が覗く。どちらかといえば細身の体つきに対して、それは一際目を引いていた。

腰ほどまで伸びた真紅の髪が陽の光を浴びて輝く。女は空を仰ぐと、少々眩しそうに目を細めた。一言で言ってしまえば相当な美女である。見るからに気の強そうな吊り気味の二重瞼。瞳の色は赤みがかった黒色だ。女が瞬きする度、目元で濃く長いまつ毛が震える。高く、整った形をした鼻。オレンジのルージュの引かれた唇もふつくと良い形をしている。輪郭は女性にしてはやや細めで凛々しい印象を与えるが、そのせいで更に気が強く見えないこともない。肌は軽い小麦色で、とても健康的な印象を受ける。

彼女の名はイラリア・アルベルジェッティ。彼女とジャン「ジャックは一般に『トレジャーハンター』と呼ばれる、世界中の財宝を追いかけている冒険家だ。千年前のエターナルミラーの崩壊——その時、人間の営みや文化の多くが海の底へと沈んだ。海の中は宝の山というわけだ。そういうこともあって、この世界にはトレジャーハンターの数は多い。といってもイラリアたちのように個人で活動する者は少数だ。トレジャーハンターの大半は、夢やロマンには縁遠い営利組織の一員として活動しているに過ぎないのだから。

イラリアたちも海に出るため、港町『ポルテルア』を目指してい

るところだった。あと半日も歩けば着くだろう。既に一週間以上旅してきたわけだから、もうすぐだと言える。空を見上げる彼女の瞳が、ある物を捉えてふと留まった。イラリアは視線の先を空に向けたまま口を開く。

「ジャン。あそこに向かうわよ」

「あそこ……？　しかし西の海に出るんじゃない……」

「変更が決まっているでしょう」

彼女の見ていたのは、目的地であつたはずのポルテルアの遙か向こう、天高くそびえる白銀の柱——エターナルミラーだった。これだけ離れた位置からでも、その並外れた大きさは確認できる。少し視線を下げれば広範囲を覆い隠す霧。その霧と、柱の手前に広がる森のために反対側の景色を窺うことはできない。しかし知識はある。あの天の柱の側には中央政府の本拠が置かれ——そしてそのエリアよりも柱に近付くことはできない。トレジャーハンターという職業柄、彼女は世界の情勢や地理についての知識に長けていた。

「しかしイラリア……あそこは禁じられた場所だ。分かっているだろう？」

ジャン「ジャックの言葉は尤もだった。エターナルミラーの周囲一帯が近付いてはならない場所だというのは、別に堅苦しいしきたり云々のためではない。進入した者は一人残らず消息を絶つ——そういう場所なのである。」

「馬鹿にしないでちょうだい。禁忌？　そんなもの知ったことではないわ。未踏の地こそ私の求める場所よ」

「しかし……あまりにも危険だ」

「ああ、もう、五月蠅くてよ！」

けたたましい怒鳴り声に、ジャン「ジャックは小さく肩を跳ねさせた。

「ジャン、あなたには失望したわ。トレジャーハンターなんてよくやってこられたものね。いいわ。それなら私一人で行くまでよ」

イラリアはそう言い放ち、ジャン「ジャックが背負った荷物を引く手繰った。その荷物を引き摺りながら一人歩いていく。並の男でも運ぶのには苦労するであろう重い荷物。引き摺ってとはいえ、一人でそれを運んでいくこの女——イラリアの強硬さは、決して見かけ倒しというわけでもないらしい。

ジャン「ジャックは啞然とした様子で、イラリアの後ろ姿を眺めて立ち尽くしていた。しかし数秒後には彼女を追っていた。

数時間後、女王顔負けの態度で優雅に歩く美女と、その数メートル後ろを一輪車を押しながら歩く、大量の荷物を抱えた大男の姿があった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0232w/>

永久の鏡 —eternal mirror—

2011年11月11日12時22分発行